「授業展開力・評価力評価スタンダード」

観点	段階	段階 1	段階 2	段階 3
B．授業展開力				
1．基礎的・基本的な授業態度（音声・表情・所作等）		学級全体に伝わる声の大きさ、話しの速さで話すことができる。自分の話し方の欠点を認知することができる。	教師の話し方や表情と子どもの反応との関連を考え、話し方を工夫したり、表情に気をつけることができる。	教育への願いが、音声・表情・所作と関わることを意識し、話し方のレパートリーを増やし、場面に応じて使い分け、表情豊かに語りかけることができる。
2．教授活動の構成と展開				
1) 個や集団への配慮		個への配慮を意識する。個それぞれに学び方があることを理解し、その特性を捉えようとする。	特徴的な個への対応を配慮事項として具体的に取り入れる。個の発言が、全体に響いているかを捉える。	想定しなかった個の行動・思考に対応するために立ち止まり、展開の方法を変更することが出来る。
2) 説明		わかりやすい言葉で、できるだけ端的に説明することができる。	子どもの理解の度合いを捉え、適切な比喻や例を取り入れ、説明することができる。	子どもがつかずいている点を推測し、それを子どもが理解できるように示し、解決を図れるように説明できる。
3) 助言・指示		助言、指示が、個または、学級全体に伝わったかを判断しようとする。	助言、指示を必要とする場面を捉えることができる。	個々の子どもの理解度を捉え、個々にすべきか、全体にすべきかを判断することができる。
4) 板書		文字の筆順や見やすさを考慮し、丁寧に板書することができる。板書と子どもの思考活動との関係を捉えようとする。書くべき内容と書かなくても良い内容を選別できる。	学習者の様子を観察しながら、板書を書くことができる。板書を見る子どもが何を考えているかを推測しようとする。	板書、子ども、子どもの思考とこれからの展開についての思考を3対3対4程度の割合でできる。
5) 教材・教具の活用		その情報から、子どもがどのように考えるかを推測し、教科書・補助教材プリントの活用を考える。	考えさせるためか、知識・技能習得のためかという目的に応じて、補助教材プリントの活用を考える。	子どもの学習にとって、どんな教科書・補助教材、プリントが良いかを考えることができる。
6) 演技・表現性		教師の演技が、子どもに何らかの影響を与えることを考えようとする。	教師の演技が、子どもにどんな影響を与えているかを考え、場面に応じ、適切だと考える演技を考えることができる。	教師の演技が、子どもにどんな影響を与えるかを考え、場面に応じた適切な演技をすることができる。

観点 / 段階	段階 1	段階 2	段階 3
3. 学習活動の喚起と促進			
1) 授業の流れや分節化への考慮	授業が子どもとの相互交流で進められたことを理解する。	予想外の反応を授業目標との関係から判断し、予定変更すべき場面かを認知できる。	個の反応から、戻る、立ち止まる、進むかを授業目標との関係から判断し、教授行動を選択できる。
2) 発問	自己の発問によって、子どもにどのような思考を促しているか考えようとする。	主発問による子どもの思考活動への効果を推測し、適宜、補助発問をすることができる。	発問等で、予想された児童の思考活動とは違う反応を捉え、子どもの現時点の到達度を推定できる。
3) 子どもの発言・行為への対応	子どもの発言や行為の真意を読み取る努力をする。	子どもの発言や行為の真意を読み取り、指導過程の修正が必要かを考えることができる。	子どもの発言や行為の真意を読み取り、授業目標との関係を捉え、指導過程を修正することができる。
4) 学習環境の構成とマネジメント	子どもの安全性及び、認知にどのような効果を与えるかを考える。	安全に配慮し、適切な指示をあたえることができる。また、子どもの反応から、学習環境に配慮する。	次の子どもの行動・認知を推測し、学習環境を創造する。
5) 学習活動への即時的対応	子どもの思考を考え、話し合い活動や作業をその目的に合わせて、取り入れようとする。	話し合いや作業によって、子ども達の思考活動は、どのように促されるかを考え、授業目標到達に向け、学習活動を組織する。	子どもの思考を活性化するために、興味関心、心的状態(友人関係)、子どもの到達度等を考え、学習活動を組織する。
4. 学習活動に対する評価			
1) 形成的評価	指導過程の文節ごとの達成すべきねらいと子どもの学習状況を捉える方法を使用し、評価する。	指導過程の文節ごとの達成すべきねらいと子どもの学習状況を捉え、指導計画のどこを修正すべきかを振り返ることができる。	指導過程の文節ごとに達成すべきねらいと子どもの学習状況を捉え、指導計画を修正することができる。
2) 机間巡視	机間巡視の意味を理解し、授業中、目的をもって机間巡視できる。	机間巡視の結果を授業展開に役立てるために、子どものどんな学習状況を把握するかを明確にして、机間巡視を行うことができる。	授業中、予定以外にも、机間巡視が必要と判断する場面を、机間指導を行うことができる。
3) 学習評価法の工夫	用意した評価法を実施し、学習内容と評価法との妥当性を振り返ることができる。	用意した評価法を実施し、学習内容と評価法との妥当性を子どもの認知との関わりから妥当性を検討することができる。	子どもの実態を直感的に捉え、学習評価法の種類と使用場面とを関連づけることができる。
C. 授業評価力			
自己の教育・社会観、教育目標、授業構成論、指導法に対する省察・評価と授業改善	具体的な教師と子ども、子どもと子どもとの相互交流を指摘できる。 予想した反応と予想外の反応を区別し指摘できる。予想外の反応の要因を探る視点を認知する。	予想外の反応が生じた要因を指摘できる。 予想外の反応に対して、別の方法を考案することができる。想定しなかった個の行動・思考に対応するために立ち止まらねばならなかった地点を指摘できる。	予想外の反応に対してとった教授行動を子どもの認知活動から評価することができる。 立ち止まってとった教授行動が適切であったか指摘できる。